



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 167

2024 年 12 月



愛とロマンの地へ（奥地宣教と日本）その2

(前号からの続き)

アルゼンチン宣教師 在原 繁

(2) 荒野に道を

しかし、道なきジャングル地帯を切り拓き、そこを大耕作地帯へと作り変える働きがどれほど熾烈を極めるものか…。移住事業の成功率の低さを見れば、それはすでに実証されている。「移住者として南米で成功するということ、それは…、宝くじに当選する確率でしょうな〜…」。これは JICA（日本国際協力事業団）の現地職員から直接耳にした言葉である。移住成功率は、ほんの数%なのである。

けがや病気で苦しんでも開拓地に医者はなく、移住時に懷に抱えてきた所持金で何とか食いつないではきたものの、早くて半年、もっても二年で使い果たす家庭が大半だったのである。所持金を使い果たした時がさあ勝負で、そこからは、日を追って移民者家族は疲労と物資不足と絶望感に打ちのめされていく。「自給自足力」と人一倍強い「精神力」を有する人以外は、ジャングルを去って行かざるを得なかった。これが南米の移住史に記録されている。

(3) アイデンティティー

ジャングル伐採と開墾により、各民族によって形成された「コロニア」（移住地）の民が、いの一に番に始めたことは「教会」と「学校」建設にあった。各移住地の中央には、民族の心の拠り所として「教会堂」があり、寄り添うように、明日の人材を輩出すべく「学校」が立てられた。学校建設の最大目的は、民族の基盤である「語学教育」にあった。この目的は現在も変わっていない。「言語」を喪失したその瞬間、移住者は「アイデンティティー」と「誇り」を失うという危機感が、教育重視の原動力となっているのである。

「この国に移住したのだから、民族の言語など必要ない。アルゼンチン国家の言語スペイン語だけで生きていこう」、と言う移住者も存在はするが、その人は短期間で「母国語」を喪失し、現地人化することになる。混血は急速に進む。人種的、文化的アイデンティティーを喪失した人を、アルゼンチンでは「クリオージョ」と呼ぶ。「日本人だと言っても『日本語』を話すことも理解することもできないなら、その人を『日本人』だと認めることはできない。」

これは、南米に住む現地人と日系人有識者たちの言葉である。日本人として生きていくか、現地に同化するかは各人が決断することで、その分岐点は「言語」である。

私たちが現在住む「モンテカルロ」には、およそ百年前の入植時に建てられた「学校」はすでに取り壊され、土台だけが残っている。半世紀以前のジャングルに建てられた学校は、すぐとなりの「宣教区・グアッタンブー」の農家の敷地内に「納屋」として現存している。

日系社会が日本語教育に力を投入しているように、ドイツ人社会のドイツ語教育も盛んで、教育熱は日系社会以上である。家庭における「ドイツ語」会話は徹底しており、その実力度は本国のドイツ人にほぼ四敵すると言われる。

反面、コロニアでの生活言語がドイツ語であるため、スペイン語ができない老人も時折見かける。この点は日系社会も同様である。自国の閉鎖的社会に閉じこもるようにして生きる人々が、現地アルゼンチン人社会との交流を促進させるには、次の世代の台頭まで待たなければならないだろう。

町（移住地を出た人々の共同体）の中央には、カトリック教会がド〜ンと天高くそびえるように建っている。例えば、私たちの宣教区モンテカルロの町である。教会は、入植開始とほぼ同時に建設されて以来約百年の年輪を重ねたため、教会の外壁はかなり古ぼけシミだらけだが、市民は中央の「カトリック教会」を意識しながら生きている。これは、この国が建国以来カトリックを国教としたことによる国策による。

カトリック信仰に迎合できない移住者は、各地のコローニアに民族の信じる宗派の教会を建設し、これを拠り所としている。例えば、ルーテル派教会、ロシア正教会、ウクライナ教会、スイス教会、その他、各国の国教会などである。

ミシオネス州に形成された四か所の日本人コロニアを見てみよう。中央には学校と公民館は存在するものの、移住地全体に宗教的施設は皆無である。祭や行事の開催時には国旗「日の丸」が掲揚され、国家「君が代」を直立不動姿勢で斉唱する。入植し、早くも四世時代となった現在でも、この習慣は変わっていない。

新年会や運動会など、行事会場となった会館やグラウンド中央や入口には「赤い鳥居」を立てるこ

とがほぼ習慣となっている。が、そこに熱い信仰心を見ることはできない。しかし、日本人の宗教意識の奥深くには「神道」並びに「天皇制」が流れていることを知る。

各地日系社会にクリスチャン（プロテスタント）は少数おるが、現地で出生した二世以降世代の大多数は、自分を「私はカトリックです…」と公言する。が、残念ながら信仰心は皆無である。聖書を日常的に読み「みことば」を土台に熱心に祈る習慣を有する人物はおられない。信仰心無くても「うちは仏教です」と言う日本国に生きる日本人と同じレベルの信仰心と思えば解りやすい。これは、現地生まれの日系人が出生してから今日まで、カトリック信仰を基盤とした社会で育ってきたゆえだろう。話を現地に戻す。

かつて、ジャングルを切り拓いた山奥にあっても、各国コロニアの教会の建物はけっこう立派なものが多く、民たちの信仰は揺るがぬように見える。が、聖書の中に生きる信仰生活を送る人は、残念ながら稀な存在と思ってよい。『うち』はキリスト教です」と人々は言うが、時の経過に押し流されるように、その信仰は形骸化しており、福音の日常性は感じられない。（次回に続く）

AMC F 世界大会に参加して

コルネリオ会 主任教職顧問 佐藤 順

A. 格安チケットは JAL 便だった

「軍人キリスト者の会の世界大会へ一緒に参加しましょう」と中野会長から促され、夫婦でサンパウロへ行って参りました。偶然見つけた最安値の航空券は、皆様からのご支援の金額に相当し、南米の航空会社で予約したにも関わらず、実際のフライトは羽田発の JAL 便でした。10 日間、家を空けることに不安がありましたが、静岡勤務の長男が、神学校で学ぶため東京への異動が決まり、大会開催の 10 月には自宅で次女と留守番できることとなりました。「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです」（ヘブル 11:1）とあります。すべてが備えられたのだから、この旅は祝される、と確信して出発しました。

B. 夫婦で伝道する退役軍人たち

サンパウロ州の会場で、先に米国から現地入りしておられた中野久永会長に迎えられ、日本の参加者三名が揃いました。全体では、世界 73 カ国から軍人、警察官、消防士、従軍牧師、その家族ら約 1,000 名が集っています。キリストにあって神と国とに命を捧げた参加者たちは、国籍や教派を超え、直ぐに打ち解け合います。その様子は、「キリストにあって一つ」という軍人キリスト者の会（MCF）の標語そのもので、初参加の私も、イタリア沿岸警備隊のチャプレン、チリ海軍の従軍牧師、米空軍のパイロットらと親しく交われました。今年 3 月に東京をご家族で訪れたカーソン氏（元米空軍少佐）とも再会できましたが、米軍人の多くは氏のように日本駐在の経験があり、日本宣教に

重荷を感じている退役軍人がいることは大きな恵みです。

大会中に 40 もの分科会が行われ、私たちは「デジタル聖書を世界に」「軍人の結婚生活」「士官学校での伝道」「教会が果たす軍人への使命」に出席しました。このうちの三つは、退役米軍人によるもので、それぞれ夫婦でご用に当たっていました。

「軍人の結婚生活」を担当したのは、F-15 の元パイロット、デレル・ジョーンズ博士（元米空軍大佐）で、彼は退役後、宣教師として沖縄に 4 年間滞在した経歴があります。「軍人の結婚」をテーマにした研究や著書は多く、その職業柄、軍人夫婦は配偶者を非常に尊敬し、よく互いに感謝するので、離婚率は極度に低いそうです。ジョーンズ博士は、祝福への四つの言葉を紹介していました。

I was wrong. (私が間違っていました。)

I am sorry. (ごめんなさい。)

Please forgive me. (赦してください。)

I love you. (愛しています。)

「これは一日 24 時間いつでも有効であり、目標は、相手よりも先に言えるようになること」と言われました。

「士官学校での伝道」の担当は、元米空軍中佐のポール・ホーマン博士で、彼は、「士官学校で聖書研究会をする価値があるのは、士官学校出身者が軍に残る確率が一番高いからだ」と言っています。ホーマン博士に、「日本の防衛大学校では、いかなる宗教活動も禁止されているので祈っててください」と言うと、「私たちの活動も継続できるように祈って欲しい。状況は困難になりつつある」とのことでした。例えば、上官が部下に聖書を贈ったりした場合、その事実が外部に漏れると、階級を利用して改宗させようとしたなどと、訴訟を起こされかねないということです。

「教会が果たす軍人への使命」では、「教会は、病院や刑務所での伝道は比較的行ってきたが、軍人への伝道は手薄だった」とブラジル人従軍牧師が語っていました。ある部隊では、牧師たちの伝道活動に難色を示していた上官も、福音に触れた隊員たちが精神的により安定し、欠席率が下がっ

たことを見て、「今やっていることを続けなさい」と従軍牧師らに伝えたと言います。「軍人も社会を構成する一員です」と、担当者は繰り返し述べていました。

C. 日本だけの問題ではない

世界の軍隊の中で、いかなる宗教活動も禁止されているのは日本だけです。防衛関係者が、魂の救いや永遠の命について知らされることなく、命を懸けて職務にあたることは、どれほど辛いことでしょう。一方、米国でも宗教への締め付けが厳しいのですから、これは日本だけの問題ではなく、世界中のクリスチャンが手を取り合い、福音の素晴らしさを証ししていかなければなりません。「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16:15)。これは万軍の主からの至上命令です。自衛隊でも、講話等で仏教や神道関係の話が出てきても違和感はないとのことですから、「改宗」目的ではなく、訓話として聖句を引用することはできるはずです。

D. 結び

大会中、中野会長がコルネリオ会の活動報告を、熱意をもって流暢な英語で発表されました。来年 10 月には、東アジアのクリスチャン軍人リーダーたち約 30 名が集うインターアクションが私どもの牛込キリスト教会を会場として行われます。会長が私たちを、その教会の牧師夫妻としてご紹介くださったことで、新たな使命感を抱きました。日本には従軍牧師は存在しませんが、コルネリオ会の教職顧問である牧師先生方が、事実上のチャプレンです。時が良くても悪くても御言葉を宣べ伝えてゆきましょう。最後に、今回の旅をご支援くださいました皆様に、夫婦共々感謝申し上げます。(おわり)

献金感謝 (2024. 7. 1-2024. 11. 30)

皆様の献金を心から感謝します。(敬称略、順不同)
佐藤 順、圓林栄喜・さゆり、後藤孝良・多美子、
中野久永、吉田 靖、小島健二、海野幹郎、
内山義彦・和子、石井克直、今市宗雄、中岡一秀、
中谷美津雄

世界大会参加所見

コルネリオ会会長 中野久永

AMCF（軍人キリスト者の会）が10月15日から20日までブラジルで開催され、73か国から1,000人を超える軍人クリスチャンが出席しました。10年前に、コルネリオ会から当時の石川 信隆会長、今市宗雄副会長と小生が南アフリカ共和国ケープタウンでの世界大会に参加しました。まさに世界中の軍人クリスチャン達が神様のみ言葉を通して一堂に集結を致しました。

今回の大会は、励まし、関係を築き、私達の偉大な神がその霊の力によって働くのを直接観察する素晴らしい時間であることを体験致しました。参加者がいつも祈りの中で、『私たちはみなキリスト・イエスにおいて一つである』という真理を経験し、様々な国、文化、言語の人々が一緒に主を崇拝し、賛美しているのを見て、深く感動しました。これは、イエスだけが真の希望であり、すべての人の主であることを裏付けました。私は、アフリカのボツワナ共和国陸軍従軍牧師のレッティ陸軍大尉と同室で、軍隊内での倫理を含む教育等で兵士とその家族からの相談に対応していると伺いました。大会2日目に彼は、本国軍司令部から少佐に昇任したと通知があり、私は神様に感謝と彼の祝福と、今後のさらなる任務と軍隊において多くの良き影響が彼を通じて兵士の上に与えられるように、主の御名によってお祈りを捧げました。

コルネリオ会は、2025年10月に中央・東アジア軍人キリスト者インターアクションを計画しています。大会での学びと交わり、祈りを通じて得られた神様の霊的な学びを具現化すべく、参加される方々に広めていこうと願っています。この為には、皆様からの継続した祈りが必要です。

AMCFは、世界中の軍人クリスチャンを励まし、弟子として育て、交わりを深めることを目的としています。私たちと一緒に祈りください。いつの日か、制服を着たすべての軍人が同じ制服を着た人から福音を聞いて受け入れることができるような働きを行っています。

AMCFの祈り

慈悲深い主よ、AMCF 世界会議への祝福に感謝します。あなたがそこで築いてくださった基盤の上に築き上げていく私達を、引き続き祝福してください。

全能の神、エル・シャダイよ、私達はあなたの導きを求め、あなたの名のもとに立ち上がり、世界中の軍人クリスチャンを励まし、弟子にしています。あなたに仕える私たちを守り、支えてください。

恵みを与えてくださる神、エホバ・ジレよ、世界会議に多くの人に参加できるようにしてくださり、ありがとうございます。ブラジルであなたが成し遂げた仕事の良き管理者となれるよう、私達を助けてください。主の御名によって祈ります。アーメン

（おわり）



参加国国旗を掲げての集合写真



世界大会会場にて

（編集子）

ご献金用の振替用紙のない方は下記アドレスにメールいただければお送りいたします。お気軽にお申し付けください。hsenrin@gmail.com です。